

高岡銅器の歴史

高岡の鋳物産業は、1611年(慶長16年)2代藩主前田利長公によって鋳物師(いもじ)7人を金屋町に招いたところから始まります。

当初は、鍋や釜、鋏などの鉄器が中心でしたが、江戸中期頃には銅合金鋳物が始まり、仏具や釣鐘、火鉢等が生産されるようになります。

幕末には全国一の鋳物産地へと発展し、また居留地貿易をいち早く行ってきました。明治期には、万国博覧会や内国博覧会に出品し高い評価得るとともに更なる技術の向上に努めてきました。

特に、明治6年に開催されたウィーン万国博覧会では、鋳物と彫金を駆使した作品が現地の人々に驚きをもって受け入れられ、以来、高岡銅器が海外で高い評価を得るに至っています。

昭和期には、欧米向けのキャンドルや暖炉周りの小物等が多く輸出され、国内では高度経済成長とともにインテリア用品や法人、個人向けギフト用品、干支置物などが大量に生産され銅器・鉄器が最盛期を迎えます。

昭和50年には、国の伝統的工芸品の第一次認定を受け、新たな組合を設立し、新商品開発、後継者育成、販路開拓に取り組んできました。

400余年の歴史を誇る高岡銅器は、今日も新商品で海外への販路開拓を行うとともに伝統的な技を駆使した文化財修復事業を展開するなど携わる技術者が日々技術の研鑽に努めております。

■ 鋳造(鋳金)

金・銀・銅・鉄・錫などの金属およびその合金を加熱・溶解し、これを土や砂、金属など不燃性の物質でつくった型(鋳型)の空洞部に流し込み凝固させ製品をつくる方法。

・双型鋳造法

最も古くからの鋳造方法で日本の銅鐸にも利用され、外型は、数十回の鋳造にも耐えるため、比較的量産に適しています。

外型は、粘土と砂を調合したもので作り、高温で焼き固めて作ります。中型は、生型法で作ったものを組み合わせ鋳造をします。

・蠟型鋳造法

繊細な形状や作者の意図を適格に表現することができる鋳造技法です。蜜蜂の巣からとった蜜蝋や、はぜの実からとった木蝋に松脂を煮合わせたもので、作った原型を土で包み鋳型をつくり、型を焼くと蝋の原型がとけてすまができます。そこへ溶解した銅を流し込むと、原型と寸分変わらない鋳造品ができます。

・焼型鋳造法

鋳型の分割の方法、造り方、組み立て方、焼き方などに高度な技術と熟練を必要とし、原形をそこなわずに複雑な置物や大きな銅像などの鋳造に適し、古来真土型鋳造法として伝えられています。

銅像や美術工芸品を作るには、最も適した鋳造法です。

まちなかギャラリー 高岡信用金庫 駅前支店



Vol.40 2019.3- 2019.6

まちなかギャラリーでは、高岡の工芸作家の作品を中心商店街のショーウィンドウに展示しています。高岡の歴史と伝統を受け継いだ美術工芸作品の本物の美しさ、素晴らしさを実際にご覧頂けます。

◆お問合せ先◆

末広開発(株)まちづくり事業部

〒933-0029 高岡市御旅屋町1222-2 TEL0766-20-0555

ホームページ たかおかストリート: www.takaoka-st.jp



般若 保

吹分四方長壺

技法:吹分



京田 政春



達磨大師

技法:焼型鑄造
象嵌



大野 博司

金銀象嵌花瓶
櫻花人物模様

技法:打出し
金銀本象嵌



中村 喜久雄



真夏の幻映

技法:焼型鑄造
(ガス型鑄造)



般若 勘溪

砂張流金水指

技法:双型鑄造



須賀 月真

水紋透水指

技法:蠟型鑄造

